

スポーツの近代化における性別二元化体制

山口 理恵子

1 はじめに

本稿では、「スポーツの近代化」を、スポーツ以外の領域で起こった近代化との関連から再考していく。スポーツの近代化に関する説明は、「暴力の排除」を契機として捉えるノベルト・エリアスの指摘や、米国でスポーツ史を研究するアレン・グットマンが提起した近代スポーツの7つの特徴にもとづくものが多い。グットマンが提起したその特徴とは、(1) 儀礼的側面を持つ一方で、霊的で聖なるものといった超自然的領域への関与がなくなったこと（世俗性）、(2) 人種や民族といった個人の属性を理由に参加を拒否されず、ルールがすべての参加者に共通になったこと（平等性）、(3) 聖職者による管理ではなく、国家的、国際的官僚機構によって管理されるようになったこと（官僚化）、(4) かつてはさほど違いのなかったゲームから（クリケット、野球、フットボールなど）、さまざまに専門分化した役割や競技ポジションが分担されるようになったこと（役割の専門化）、(5) 「目的と手段」という観点からルールがたえず吟味／修正され、科学的なトレーニングや最新の技術を駆使した用具の使用による効率性が重視されるようになったこと（合理化）、(6) 統計などを用いて数値が重視されるようになったこと（数値化）、(7) 「記録」という近代的用法が挑戦の対象になったこと（記録への挑戦）(3-4) である。

グットマンによるこれらの特徴は、近代化されたスポーツ内部の変化の様相を的確に捉えてはいるものの、女性学・ジェンダー研究が明らかにしてきた近代社会の特徴との関連からみていくと、それは必ずしも十分な提起とは言えない。女性学・ジェンダー研究では、非対称的な男と女の性別二元化構造を「近代」という時代背景を媒介させることによって歴史化し、性別役割分業や家族のありかたが相対的であることを詳らかに暴いてみせた。後述するように、スポーツが時代的変遷の中で流動的にその「質的な意味づけ」を変化させてきたことを辿れば、スポーツ以外の領域における近代化による変化もスポーツの変化にとっては重要であり、しかも、競技スポーツが性別の二元化を強固に保ちながら発展してきた経緯からして、スポーツの近代化の特徴の中に性別二元化体制を含めることは的外れではないはずだ。

本稿では、スポーツの近代化の特徴の一つとして性別二元化体制を含めることの妥当性を検討するために、スポーツ以外の領域（家庭、教育など）で性別二元化体制が確立される経緯を探りながらスポーツとの関連を考察していくこととする。なお本稿では、産業革命および市民革命以後に変化した時代背景を「近代」とし、その近代社会の要請に伴う物事の変化の過程を「近代化」と呼ぶこととする。

2 性別の二元化とは

性別の二元化は、字義通り、性を二つに分けることを意味するが、往々にして想定される二つの性は、男と女である。また性別の二元化は、「ジェンダー」という概念に置き換えて検討が可能になる。ジェンダーとは、男女共同参画の施策をめぐる議論の中で、しばしば論争の火種となる言葉・概念であるが、もともとこの用語は性別をあらわす文法用語であったものを、1970年代に入って女性解放運動を基盤とするフェミニズムが用いるようになったことを契機として広まるようになっていった。フェミニズムがジェンダーという概念を採用するようになった理由として、日本において女性学を牽引してきた学者の一人である上野千鶴子は、「自然的とされ、したがって変えることのできないとされた性差を相対化するため」（『差異』、3）であったと指摘する。すなわち「フェミニズムは「女らしさ」の宿命から女性を解放するために、性差を自然の領域から文化の領域に移行させ」（4）、「生物学的性差」（Sex）に対する「文化・社会的性差」（Gender）を登場させることになった。

「文化・社会的性差」として概念化された「ジェンダー」という用語を獲得することによって、学术界のみならず社会一般においても「文化や社会の中で構築される性」の存在が明らかとなった。この点においてフェミニズムにおけるジェンダー概念の導入は重要であったと言える。しかし1990年から、「生物学的性差」と「文化・社会的性差」を個別に捉え、前者の性差を前提とした後者のジェンダー概念を修正する動きが高まるようになった。

1985年に、イヴ・コゾフスキー・セジウィックの『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（原著：*Between Men: English Literature and Homosocial Desire*）が発刊され、1990年に同じくセジウィックの『クローゼットの認識論』（原著：*Epistemology of the Closet*）と、ジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』（原著：*Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*）が出版されたことを契機に、ジェンダー概念のパラダイム・チェンジが生じるようになった。セジウィックは、「ホモソーシャル」理論¹⁾を、バトラーは「ジェンダー＝パフォーマンクス性」理論を打ち立てることにより、フェミニズム研究のみならずクイア理論にも多大な影響を及ぼすこととなった。ここでは、主にバトラーのジェンダー概念を手がかりとして、性別の二元化を概観していくこととする。

従来のフェミニズムでは、文化的・社会的な性差を生物学的な「男」（オス）と「女」（メス）を前提とした上で問題化するものであった。しかしながらバトラーは、「自然」や「起源」とされてきた「男か女か」という二元的な生物学的基盤さえも、実は異性愛主義にもとづいた、言説を通じて繰り返し身体を様式化するジェンダーのパフォーマンス効果によるものであると説いた。したがってそのような行為／演技は、ジェンダー・アイデンティティを安定化させるのものではなく、常に言説実践によって指示対象をずらす可能性を秘めている。

性を表す次元は、遺伝子、外性器、内性器、性自認、性役割、性的指向、性欲望、性実践などさまざまであり、これらの多様な次元を踏まえれば、性のありかたは「男と女」の二

つの性に限定されず、むしろ、二つの性に限定することの問題性が逆照射されることになる。とりわけ近代以降の社会では、生殖という異性愛的な規範が優勢となり、身体の差異（ペニスがあるかないか）を基準に男と女が決められるようになった。そして近代は、男と女の二つの性を前提に、ふるまいや容姿、性的指向、性役割などを振り分け、あたかもそれぞれが首尾一貫しているかのごとく、人々を言説化していくようになった。

このバトラーによって提起されたジェンダー概念は、性別二元化体制によって成り立つスポーツの普遍性を相対化する上で重要である。特に競技スポーツでは、性別二元化体制にもとづきながら、科学の言説やルールという法の介入により「女性種目」に参加可能な「女」を常に前提としている。1960年代から導入された性別判定検査の正当性は、女性種目に男性が出場することの「不公平さ」を言挙げすることによって成り立ってきたのだが、検査の実施は女性アスリートのみを対象に、科学という手法を用いて女性身体の男性身体からの差異化を図るものであり、結果として性別二元化体制の保持・強化につながっていた。その一方で、性別判定検査が科学的に精緻化されればされるほど、男女の分類はますます曖昧になるという矛盾も抱えていた。

さらに、2004年のアテネ五輪開催前に、IOC（国際オリンピック委員会）は「性同一性障害」のアスリートが一定の条件を満たした場合に限って、五輪への出場を許可する決定を下した。その条件とは、（１）性別適合手術を受ける、（２）法的に新しい性となる、（３）適切なホルモン治療を受けて手術後２年が経過している、というものであるが、これらの内容からIOCの決定は、性の多様性（Sexual Diversity）を容認しているようでありながら、「男か女か」のどちらかの性になることを厳格に求めていることがわかる。この点でIOCの決定は、「第二の性別判定検査」²⁾とも呼び得る内容であったと言えよう。このように、（特に競技）スポーツはいまだ性別二元化体制を強固に保ち続け、男と女の身体的差異を本質的なものとして可視化する機能を果たしている。だが、バトラーによるジェンダー概念に依拠すれば、男か女かという性別の二元化を前提とするスポーツであるがために、その体制の虚構性が露にされる可能性も同時に秘めている。

3 スポーツとは

では、本稿が焦点をあてていくスポーツとはどのような概念なのだろうか。日本語ではスポーツを、「運動」という言葉を用いて表すこともあれば、スポーツの代わりに「体育」という言葉が使われることもある（たとえば「国民体育大会」など）。またスポーツへの関わり方も、直接身体を動かして実践するものから、テレビや観客席からスポーツを見る行為、ネット上などでスポーツについて書く行為、スポーツ大会を支える行為まで多岐にわたっている。さらにスポーツ実践においては、競技を目的とするもの（競技スポーツ）から、美容や健康を目的とするもの（フィットネス）など、あらゆる目的に応じたスポーツが存在する。このようにスポーツという言葉の使用をめぐるのは、使用する文脈や使用者によって異なっている。

『最新スポーツ大事典』によると「スポーツ」の語源は、ラテン語の「デポルターレ (deportare)」であり、それは「人間の生存に必要な不可欠なまじめなことがらから一時的に離れる、すなわち気晴らしする、休養する、楽しむ、遊ぶなどを意味した」(521)。そして中世フランスでdeportareは、desport (デスポール) になり、16 世紀に入るとsporteもしくは省略したsportがイギリス人によって使用されるようになったという。また当初のdeportareからsporteおよびsportが使われるようになると、その意味は「<ゲーム、または気晴らしの特定の形式、とりわけ戸外で楽しめるもので、ある程度の身体活動を含んでいるもの>」(521)を指すようになった。17 世紀から 18 世紀にかけては「<野外での身体活動をとまなう気晴らし>とりわけ<狩猟>または<勝負ごとにかかわる賭博や他人に見せびらかす行為、活動、見世物>」(521)を意味するようになった。19 世紀の中頃になると「<競技的性格をもち、戸外で行われるゲームや運動に参加すること、そのようなゲームや娯楽の総称>」(521)を意味する言葉へと変化した。今日では、「スポーツ」を広義に捉える見方と狭義に捉える見方の両方が存在しており、前者においては「楽しみや健康を求めて自発的に行われる運動」を指し、後者においては「競技として行われる運動を意味する」(521)とされる³⁾。

スポーツ哲学、スポーツ社会学の研究者である稲垣正浩は、「スポーツ」と「スポーツ文化」を「中心」と「周縁」という観点から論じ、「「スポーツ」といった場合にはスポーツの「中心」を形成している競技スポーツそのものを意味し、「スポーツ文化」といった場合には、スポーツを成立せしめている「周縁」のもろもろの文化要素をも包含した、広い概念として捉え」、遊びや娯楽、武道や舞踊を含めた広い文化現象として「スポーツ文化」という言葉を提唱している(126-201)。スポーツ社会学を専門領域とする杉本厚夫は、ヨハン・ホイジンガやロジェ・カイヨワ等の研究者たちの「遊び」を出発点とするスポーツ概念をまとめる形で「スポーツは、プレイを中核とし、ゲームによって構造化され、社会において文化として組織化された身体活動」(32)としている。スポーツと美学をテーマに研究している樋口聡は「体育」と「スポーツ」を分け、「スポーツは、教育とは本質的に関わりなく作り出された、遊戯性、組織性、競争性、身体性を特性とする文化的産物である」(22)としている。

また 20 世紀におけるスポーツの国際的な発展にともない、各国で多義的に用いられてきたスポーツ概念に対して、統一した見解が必要とされるようになった。しかし類似した見解が採用されてはいても、一つとして同じ定義は存在しない。たとえば、1968 年の国際スポーツ・体育評議会 (ICSPE) の「スポーツ宣言」の中で、スポーツは「プレイの性格をもち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対決を含む運動」と定義された。一方日本では、「スポーツ宣言」以前の 1961 (昭和 36) 年にスポーツ振興法が成立し、そこでスポーツを「運動競技及び身体運動 (キャンプ活動その他の野外活動を含む) であって、心身の健全な発達を図るためにされるもの」と定義している。その後、1970 年代にヨーロッパを中心に活発化した「スポーツ・フォア・オール (みんなのスポーツ)」運動⁴⁾に

より、1975 年のヨーロッパ・スポーツ担当閣僚会議で「ヨーロッパ・スポーツ・フォア・オール憲章（ヨーロッパみんなのスポーツ憲章）」が採択され、「競争的なゲームおよびスポーツ」「野外活動」「美的運動」「調整運動」を含む広義のスポーツ概念—楽しみや健康を目的とする運動やダンス、体操をも含むあらゆる身体活動を意味する概念—が提唱された（岸野ほか、522）。「ヨーロッパ・スポーツ・フォア・オール」はその後、1978 年にユネスコによる「体育・スポーツ国際憲章」によって世界的に広がっていく。

スポーツ史の研究者であるレイモン・トマは、近代オリンピックの創始者であるピエール・ド・クーベルタンによるスポーツの定義から始まるいくつかの定義を紹介しながら、スポーツに関する複数の定義が存在してきたことに関して、「時代に則した価値づけを著者が選択しながら、独自の見解が盛り込まれてきたためである」と説明している（27）。また『最新スポーツ大事典』によると、スポーツは「それぞれの時代や社会における、遊びや休養・娯楽生活のおくり方と深くかかわっており、その意味・内容は固定的ではなく、時代や社会の慣習によって変化してきた」ため、「日常的な用語としての＜スポーツ＞は、このことばを使う人々の生活習慣と関連して多義的であ」ったと記している（521）。

つまり「スポーツ」とは、固定的で普遍的な定義を持たず、時代や社会状況に応じて、また意味を付与する者の選択に応じて、いく通りもの解釈や意味づけもを可能にする概念であると言える。時代ごとの社会変化に応じて、スポーツの意味づけも変化してきたということは、各時代の支配的な思想や規範がスポーツに反映されてきたことを意味する。したがってスポーツは、普遍的概念として見られるものではなく、時代ごとの社会事象や支配的な観念を反映しながら、それ自体もその意味づけを変化させるものとして捉えられるべきなのである。

4. 社会の近代化

では、スポーツの近代化が起こるその背景には、どのような社会的な変化が関連しているのだろうか。ここでは、スポーツの近代的な変化に直接影響を及ぼしたヨーロッパ諸国のうごきに注目していく。

18 世紀半ば頃からイギリスでは、機械の発明により大量生産が可能となり、家内制手工業から工場制機械工業へと産業構造が変化した。これにより生産手段を資本として私有する資本家（新興中産階級、ブルジョワジーと呼ばれた）が登場し、社会の主導権を握るようになっていった。資本家は、労働力以外に売るものを持たない労働者から労働力を商品として買い、それを上回る価値を持つ商品を生産して利潤を得る「資本主義」という経済構造（およびそれにもとづく社会）を形成していく。資本主義とは、利潤追求を原動力とする資本の支配する経済体制のことであり、その体制が誕生した当初は、商品生産が支配的であった。資本主義の生産性向上を重視する考えは、市場と関連する他の領域（特に家庭や学校）の中にも取り入れられた。

資本主義社会では、資本家と労働者という階級構造が構築されることとなるが、そこで

は市場への労働力の提供、すなわち生殖によって次世代を再生産する女性は、市場の外部—私的領域、家内領域—に置かれることとなった。さらに資本主義社会は、より多くの資本を蓄積するために、原料を安く手に入れ、余剰資本を投下することのできる植民地を国外に確保するようになっていった。これにより、植民地と宗主国という階級も確保されるようになる。このことから、市民革命によって封建制を解体し、市民の自由と平等が保障されたはずの近代市民社会は、産業革命後に確立した資本主義体制によって男と女、資本家と労働者、宗主国の人々と植民地の人々といった新たな階級（階層）的対立を多くはらんでいたことがわかる。しかし近代国家は、そのような矛盾を人々が疑問を抱くことなく支持し、正当化し、矛盾への反発を抑制していくように、家族や学校教育を制度化し、管理していった。

さらに資本主義社会では、生産物が使用価値と交換価値をもつ商品となり、全ての生産物を客観的に価値づける「貨幣」によって交換をおこなっていくようになる。生産労働としての労働力は、貨幣によって評価・計量可能なものとして商品化され、労働力の質的価値は無視されることとなった。すなわち、労働力の量的価値を重視する市場では、生産力を高める機械としての身体を必要とし、そのようには機能し得ない身体—たとえば高齢者や障害者など—を隠蔽し、周縁化し、排除した。後述するように、市場における生産優先の原理は、機械的身体こそが「正常」で「理想的」であるとする身体規範として、スポーツを通じて視覚化されるようになった。

利潤を得るために生産性を重視する資本主義体制は、あらゆる領域の基盤となっていった。さらに家内制手工業から工場制機械工業への変化によって、労働力が都市に集中する「都市化」現象が起こった。都市化は、人口過密によるさまざまな社会問題（環境問題、健康問題など）を引き起こすと同時に、人口が過疎化する地域を生み出すこととなった。このような一連の社会構造の変化は、一般的に「産業革命」と呼ばれている。19世紀になるとベルギーやフランス、ドイツ、ロシアなどにも産業革命が波及していった。

産業革命と並行して、イギリス、フランス、ロシアなどでは封建制にもとづく国家、絶対王政による国家の解体を目ざす市民革命も起こり、国家（中央政府）から市民社会（住民参加にもとづく政治）が分離し、市民が参政権を得ることによって議会制民主主義が確立した。市民革命では、人間の自由と平等にもとづく人間解放の理念が掲げられ、市民権や参政権が市民によって獲得された（ただし、この時代に「市民」として認められたのは成人男性であり、植民地ネイティブ、ユダヤ人、プロレタリアート、女性などは「市民」の構成員から除外されていた）。すなわち市民革命によって市民は、「諸個人が恣意的な強制力によることなく、平等に自らの自由な活動を追求する権利」（岡野、38）を手にするようになった。

だがそのような権利は、法的保障にもとづいて実現されるものであり、必然的に近代的市民は、「国家」という共同体の構成員—シティズンでもありネイションでもある構成員、どちらも「国民」と訳される—であった（岡野、38-47）。またベネディクト・アンダーソン

は、「国民」が均質で主権的な者として創造／想像され、統合されることで、共同体としての「国民国家」は成立すると述べている(22-26)。いずれにしても近代社会における個人は、生まれながらにして国家の構成員であり、国家の構成員であるからこそ自由や平等が保障され、それらが保障されるために市民は、国家に対して忠誠を誓い、国家への帰属意識を持つことが要求されている。したがって近代化とは、市民を「国民化」していくプロセスのことであり、それは、生産性を重視する資本主義の理念に沿っておこなわれていくこととなった⁵⁾。

「国民化」のプロセスの中で最も重要であり、その根幹とみなされたのは、「近代家族」であった。近代社会において登場した資本主義経済は、公的領域において生産を担う場(市場、企業)と、私的領域において再生産を担う場(家族、家庭)を空間的に分離させ、前者に男を、後者に女を配置するようになった。このような性別の二元化が制度的に保障され、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業も誕生することになった。しかしながら、生産を担う公的領域(市場)と次代再生産を担う私的領域(家族または家庭)は、空間的に分離はしたものの、労働力の供給が近代家族によって行なわれたことから、両領域の関係性は相補的であったと言える。このように「市場と家族の分離を保持し、それぞれの機能が十全に遂行されるように規制するのが、近代国家の役割」であった(落合、19)。

近代家族を研究する論者たち(ショーター 1987、落合 1990、西川 2000、山田 2003 など)は、公的領域と私的領域が空間的に分離するとともに、フィリップ・アリエスが概念化した「子どもの誕生」が「近代家族」の形成に大きな契機となったことを指摘している⁶⁾。18世紀以降、西欧社会では子どもの存在価値が高まることによって、子どもとの関わりや子どもの衛生や健康に留意する意識が向上し、「子ども中心主義」が成立するようになった。すなわち、近代国家が確立される過程には、子どもに対する「不完全な人」という認識から、「愛情による世話と教育が必要な対象」という社会的な認識の変化があり、この変化によって、子どもは家庭や学校で養育・教育されなければならないという考え方が広まるようになっていった。

5. 家庭の変化

子どもが中心となる近代家族の形成は、家庭内の性別役割分業をさらに推し進めることとなり、そのことは家族以外の領域にも派生していくこととなった。公的領域と私的領域の分離や子どもを中心とする家族形態の変化によって、女性に対するまなざしも変化するようになった。それは女性が、「子どもを産む」という存在から、「子どもを産み育てる母」という存在へと変化し、「母」による「子どもへの愛情」が自明視される「母性愛」という概念が登場した。子どもを産むという女の身体的機能に、子どもを養育し、世話をし、健康や衛生に配慮するという情緒的側面までもが結びつけられることによって、女性の性役割は確固たるものとなり、いっそう女性たちは私的領域へと囲い込まれるようになっていった。

近代家族に関する研究を行なっている田間泰子は、社会の近代化によって誕生した「母性」を社会的な制度と捉え、その必要性が声高に強調されるのは「女性の身体と子どもの正常／異常という文脈を社会的圧力として統制」(17)するためであると言及している。そしてこの「母性」が制度として完成するためには、「(1)女性は皆、母親になるものだ、(2)母親は皆、わが子を愛するものだ、(3)子どもは皆、実母の愛を必要とするものだ」という3つの前提が「自明視され、そこからの逸脱が統制されることが必要である」(12-13)と指摘している⁷⁾。

女性身体の次代再生産機能に付与される「母性」の制度化は、性と国家の密接な関係性を指摘したフランスの思想家ミシェル・フーコーの指摘とも重なる。フーコーは、18世紀末の西洋社会が教育と医学と経済を媒介にしながら、性を国家的な問題へと発展させたことを指摘している(『性』、148)。本来、私秘的かつ個人的な性の問題が国家的な問題にまで発展するようになったということは、「社会集団全体とそれを構成する個人の一人一人が、自らを監視するように要求される」事件(問題)であり、そのような性の監視や管理が家族の中に閉じ込められるようになっていった。また性の管理や統制の役割を家族(家庭)が担うことによって、近代家族そのものの形成も促進していくこととなった。

フーコーは『性の歴史Ⅰ：知への意志』の中で、18世紀以降に家族制度の周縁で発展した知と権力に関わる特殊な装置、すなわち「性的欲望の装置」が、徐々に家族そのものが性的欲望の装置になる(強調は引用者)という変化を指摘する(141)。「性的欲望の装置」の一つにフーコーは、「女の身体の高ステリー化」を挙げているが、それは、この時期から「女の身体」が、性的欲望に満たされた身体とみなされるようになり、病理化され、医学的実践の場で分析され評価され貶められる対象になったことを意味する。なかでも「神経質な女」は、「母」の対概念として高ステリーのイメージと結びつき、問題視されるようになった。このような「女の身体」へのまなざしは、生殖に結びつかない「女の身体」や、女の性的欲望の排除、女のセクシュアリティの規制を目的としていた(134)。

またフーコーは、他の「性的欲望の装置」として、自慰行為にふける子どもの性を危険な対象とみなし、子どものセクシュアリティを規制・管理する「子供の性の教育化」、夫婦のセクシュアリティを社会化し、マルサスの人口調整の手段として規制する「生殖行為の社会的管理化」、同性愛者や性倒錯者の性的快楽を病理化し、矯正し治療すべき対象とする「倒錯的快楽の精神医学への組み込み」(134)を挙げている。「女の身体の高ステリー化」を含め、これらが18世紀以降に「性的欲望の装置」となったのは、その時期から人々の存在が労働力や国力とみなされるようになり、「生殖＝再生産」を高めることが重視されるようになったからである。その結果、婚姻関係と性的欲望が、心理学や精神病理学に組み込まれていくようになり、生殖を伴わない性的欲望や逸脱した婚姻関係が「異常」とみなされ、「病理化」されていくことになった。ここに「異性愛中心主義」という概念と規範も登場するようになった⁸⁾。こうして性は、家族システムの中に閉じ込められるようになり、家族の外部では、精神病医や教育者、司祭、牧師といった「専門家」が家族を支えるよう

になった。そして人々が「自らのうちにどんな微かな性的欲望の痕跡でも見つければそれを狩り出し、自分自身から世にも困難な告白を強引に引き出し、それについて詳しく知っているすべての人々の耳を動員し、自己を隅から隅まで無限の検証へと開く」(137) という管理体制のもと、近代的主体形成が行なわれるようになっていった。

6. 社会の近代化と学校教育

これまで述べてきたように、近代国家では、産業革命による産業構造の変化と市民革命による絶対王政の崩壊にともなって、資本主義経済を基盤とする社会が確立し、それにもなつて公的領域と私的領域が分離するようになった。私的領域では、子どもを中心とする「近代家族」が構築されるが、それは家族に性的欲望の管理や統制を担わせることによって、次世代を労働力や兵力として公的領域に差し戻すことが目論まれていた。また、公的領域と私的領域を空間的に分離させるようになった近代国家は、「私的領域で再生産された諸主体を、公的領域の適切な担い手へと変換」し、「公的領域のさまざまな要求を、私的領域へ媒介する」メカニズムとして、近代の学校教育制度を誕生させることになった(橋本、79)。

フランスのマルクス主義哲学者のルイ・アルチュセールは、資本主義社会(市場)の中で必要な労働力が再生産されるためには、多様に資格付けされるだけではなく、「規制の秩序の諸規則への服従の再生産」、すなわち支配イデオロギーへの服従の再生産が必要であるとし、警察、軍隊、監獄など、暴力によって機能する抑圧装置とは別の「国家のイデオロギー装置」を概念化した。アルチュセールが概念化した「国家のイデオロギー装置」とは、国家における支配的観念が、個々人に内面化され、支持され、容認され、それに沿って自発的に行動していくことを「資本主義の学校システムや別の諸審級、諸制度」(9-20)が保障していくことを意味する。国家のイデオロギー装置には、学校や家庭、メディアやスポーツなどが含まれるが、特にその中で、学校が教会に代わって主要なイデオロギー装置となつていった。

アルチュセールのこの考えは、ミシェル・フーコーが明らかにした近代社会の権力構造、すなわち「規律・訓練」(discipline)と重なる。フーコーは、「身体の運用への綿密な取り締まりを可能にし、体力の恒常的な束縛をゆるぎないものとし、体力に従順＝効用の関係を強制する方法」、すなわち「規律・訓練」が、18世紀において重要になったことを指摘する(『監獄』、142-143)。フーコーは、古典主義時代から身体が権力の対象であったことはすでに発見されていたことを言及した上で、18世紀は規律・訓練という技術に、斬新さがあつたと分析している。この規律・訓練は、絶対的な権力からの禁忌や義務を強制する方法ではなく、奴隷制のように身体の占有関係でもなく、監視と評価と賞罰、質や長短の測定がたえず可能な方法で、「個々人による自分自身の身体の統御の増大を主要目的とする」(『監獄』、143)ものであつた。すなわち規律・訓練は、身体と精神の内部から個々人が自分自身を規律化・規格化し、主体を形成していくという権力であつた。

近代社会において顕著になった身体への規律・訓練による権力は、「身体の構成要素・動作・行為に対する計算された操作たる強制権コエルシジョンによる政治」であった。（『監獄』、142）このような政治は、軍隊のみならず、子どもの身体を対象とする私立学校の中でもおこなわれるようになり、学校では生徒を数量化し、「逸脱を明示し、性質と能力と適性を階層秩序化する「試験」が儀式化されるようになった（『監獄』、185）。試験は、規格化をおこなう視線となり、試験によって生徒は資格を付与され、等級を定められ、あるいは資格付与を否定されて処罰されるようになった（『監獄』、188）。フーコーは、試験を介しておこなわれるこのような規律・訓練の権力が、個々人を規律化する上で最も効果的であったと指摘している（『監獄』、175）。

教育思想などの専門家である宮澤康人も、「子どもを一個の人格と見なし、その個としての子どもの内面に向かって、合理的に作用を及ぼそうとする技術」（23）が、近代における教育であると言及している。そして「その教育の目的は、一人ひとりの子どもを社会の進歩発展の担い手に育てること」（23）であるとし、アルチュセールやフーコーらと同様の近代の教育思想を指摘する。近代教育の発生に関するそれぞれの見解は、いずれも「近代家族」成立の過程の中で「子ども」観の変容（＜未熟な人間＞から＜世話と教育を必要とする対象＞へ）に伴い、次世代の子どもたちが将来、近代社会に適合しながら近代的主体として機能していくために、合理的に育成する教育を保障していくことが国家的課題の一つになったことを表している。

しかしながらこの時期において、公的領域で想定されていた労働力は男子のみであり、したがって学校教育制度を必要とする対象も、もっぱら男子に限られていた。私的領域（家内領域）にとどまる女子には、公的領域と私的領域の「橋渡し」となる学校教育は不必要であるとする考え方と、女子は男子より知的にも体力的にも劣るという偏見が、女子の学校教育への導入を遅らせることとなった。女子教育の歴史に詳しい村田鈴子によると、女子教育が公的機関の中で実践されるようになったのは、19世紀に入ってからのものであり、それはアメリカにおいて最も早く着手されたという（28）。

19世紀前半から、女性教師養成をめざす女子教育が誕生し、その中頃から女子大学設立のための運動が繰り広げられるようになった。その背景には、南北戦争を契機として女性の社会参画が高まり、それまであった「女性は男性よりも知的に劣る」という偏見が次第に薄れていくようになったことがあるとされている。その一方で、「大学教育は女子の生活を豊かにし、教育のある妻は賢明で、良い母になる」（村田、65）という「良妻賢母」観に支えられながら、女子大学は増加していったとされる。このようなアメリカにおける女子教育の思想は、明治維新後に新政府のもとで制度化された日本の女子教育にも影響を与えることとなった。

7. スポーツの近代的発展

アメリカにおける女子大学設立の増加や大学の共学化は、女子が知的レベルにおいて男

子と対等であることが認められるようになったことと関連するが、体力面においては、男女の差異が強調され、それは主に「体育」授業の内容において顕著であった。身体を介しておこなわれる体育は、公的領域に適した労働力や兵力を産み出すために、学校教育機関の中で最も重視されたカリキュラムの一つであった。現在、日本で考えられている体育は、18世紀からイギリスのパブリックスクールで新興中産階級（ブルジョワジー）が競技スポーツ（主に集団スポーツ）を奨励し、スポーツを体系化、組織化していく流れと、同じく18世紀にドイツや北欧諸国を中心に、国民や民族を統合する目的で、体操・運動が学校に定着していくという流れが、両者統合されることによって誕生した。

パブリックスクールとは、上流階級の子どもたち（男児のみ）が通う中等教育機関であったが、新興中産階級の人々が徐々に社会的な勢力を強めていくようになると、そのような人々の子どもたちもパブリックスクールに通うようになっていった。新興中産階級とは、先述のとおり、産業革命によって生産手段を資本として私有するようになった資本家のことを指すが、経済的な成功を収め、新たな階級として登場することになった彼／女らは、自らの地位を確固たるものとし、社会的な名誉を手にするために、土地を購入し、その当時イギリス社会のエリートとされていた「ジェントルマン」（もともとは不労所得者の地主貴族を指すが、聖職者、官吏、医者なども含まれた）の仲間入りを果たそうとした。ジェントルマンとなるには、教養と教育を身につけることが重要とされたことから、新興中産階級の人々は、自分の子どもをパブリックスクールへ通わせるようになったとされる。

やがて新興中産階級は、パブリックスクールにおいてもその地位と発言権を強めるようになり、パブリックスクール内部の改革に着手するようになった。その一つがスポーツの改革であった。新興中産階級の人々は、それまでの「遊び」の要素の強い未分化なスポーツを、ルール of 明文化や統一、ゲームの体系化、組織化、合理化を促進させることによって改革し、教育活動の一環としてスポーツを奨励するようになった。先のアレン・グットマンによる7つの特徴は、おそらくこの過程におけるスポーツの変化について明示しているものと思われる。

パブリックスクールにおけるスポーツの改革は、やがて「アスレティシズム」を誕生させる。アスレティシズムとは、「競技主義」、「競技礼賛」、「勝利至上主義」と訳される概念であり、アスレティシズムにもとづく対外試合や競技会では、「より速く、より高く、より強く」機能する身体能力の競い合いがおこなわれるようになった。またそのような対外試合や競技会では、数値化と序列化によって勝敗や優劣を明確に決定し、「より速く、より高く、より強く」機能する身体 of 「正当性」を視覚化する場となっていく。すでに述べたように、資本主義経済のもとで生産性を重視するようになった近代社会では、労働力や兵力として機能する身体が重視されるようになるが、アスレティシズムのもとで形成され、正当性を与えられる「より速く、より高く、より強く」機能する身体とは、まさに近代化された社会で労働力や兵力として生産性を向上させ、活用し得る近代的かつ機械的身体であったと言える。

パブリックスクールにおけるスポーツの改革でさらに重要なのが、新興中産階級の人々が、ジェントルマンに必要な資質として、忠誠心や帰属意識、人格形成等の道德観や価値観を身につけることを重視し、スポーツ実践によってそのような道德観や価値観を獲得することができると考えていた点である。すなわち、集団生活を通して人間関係を育み、帰属するチームやチームメイトへの友愛・忠誠の精神を養い、人格を陶冶するためにスポーツが有効とみなされたのであるが、そのような精神的な側面がスポーツにあえて付与されるようになったのは、近代的身体形成の正当性を知的にも保障し、そうすることでそのような身体形成をますます促進するためであったとも考えられる。

フーコーが、「試験」という近代の権力装置が身体のみならず精神にもはたらきかけるメカニズムとして重要であったことを指摘したように、アスレティズムにもとづく競技会の巧妙さは、単なる命令によって動く機械的な身体を奨励したのではなく、近代社会に貢献し得る「身体」というものを、身体能力の数値化によって、身体の序列化を図り、なおかつそれを人々に可視化した（見せつけた）点にある。さらにそのような身体形成は、道德的な意義によって保障され、近代的身体の主體的な獲得が、ますます人々に内面化されていくよう仕組まれていた。

では、ドイツや北欧諸国における18世紀からの変化はどのようなものであったのだろうか。これらの国々では、国家への忠誠心や民族意識を高めることや、国民や民族の体力増進の強化を目的として、近代体育が創始されるようになった。ドイツでは、J.F.C. グーツムーツとフリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーンによって、体操が普及し、ヤーンは「ツルネン運動」を考案した。ドイツと同じ時代にスウェーデンでは、ベール・ヘンリック・リングが「スウェーデン体操」を、デンマークではフランツ・ナハテガルによって「デンマーク体操」が創始され、学校教育の中で定着していくようになった。19世紀中期には、チェコスロバキアでミロスラフ・ティルシュの主導のもと＜ソコル運動＞が展開されていった。

ここで注目したいのが、民族主義運動に伴い身体訓練の必要性が高まるようになった背景である。特にドイツでは、社会の文明化が進行するにつれて、男性が「自然」の力を失うことで、身体的・精神的脆弱さを示したり、感情を抑制できず、受身的で依存的な傾向を示すといったあり方を危惧する見方が、啓蒙主義者たちの間で強まったと言われている。啓蒙主義者たちは、男性のそのようなあり方を男性の「女性化」と考え、「女性化」した男性は、愛国心をも喪失するとみなされた。そして男性が「女性化」を克服し、ドイツ人男性の「男らしさ」を回復するためには、規則正しい身体訓練をすることが必要であると考えられるようになった⁹⁾。これまで、どちらかと言えば、スポーツの性別二元化に関する問題は、女性の男性からの差異化に焦点が当てられる傾向にあった。だが、近代体育の誕生の背景にある男性身体訓練の必要性と、さらにその必要性が求められた背景にある男性性のジェンダー形成という点からして、男性自身も性別二元化体制に組み込まれ、そこに組み込まれることによって男性としての近代的身体を獲得するようになっていったことがわかる。ドイツにおける男性の「女性化」への懸念は、やがて周辺諸国にも広がってい

くようになった¹⁰⁾。

さらにイギリスのパブリックスクールと同様、ドイツやその周辺諸国においても、道徳的な意義と結びついて体育訓練の必要性が強調されてきたことが、男性史に詳しいジョージ・L・モッセによって言及されている。モッセは、身体訓練の道徳的な意義として、「健康的で美しい身体に高貴な魂が宿る」と、当時のドイツを中心とする西欧社会では強調されていたことを指摘している。今でこそ「健康美」は女性をあらわす言葉として使われているが、当時の社会では、男性の「女性化」を体育（身体訓練）によって克服することが叫ばれながら、その一方で、男性の「男らしさ」の獲得に、身体の「美しさ」が結びつけられていた。

おそらく、男性の「女性化」への懸念とその克服が、身体訓練による「美しい」男性身体追求と結びついたのは、スポーツ・体育領域が男性だけで占められていたことに起因すると思われる。すなわち、スポーツや体育領域に女性は存在せず、スポーツの外部に置かれた女性とはすでに差異化されていたために、スポーツ領域内部で女性の差異化を図る必要性はなく、また男性領域であったからこそ男性身体に「美しさ」を結びつけ、強調することが可能であった。しかしながら、女性がスポーツ・体育の領域に参画するようになると、男性の「女性化」の克服のための身体訓練は、逆説的に女性の「男性化」を促すこととなり、近代社会で誕生した性別二元化体制はあえなく崩れてしまう。それ故に、女性の身体活動には、「女性らしい」外見が損なわれてしまうなどの女性性に対する懸念や警告が常につきまとうようになったのである¹¹⁾。

イギリスのパブリックスクールでのスポーツの奨励や中・北欧諸国における体操・運動の奨励は、男子を対象とするものであり、当初は、男子のために存在し、改良が進んでいった。なぜなら、近代社会では労働力や兵力となる身体を求めており、公的領域と私的領域を繋ぐように制度化された学校教育が、生産性に結びつく身体形成を集団的かつ合理的に担うことができたからである。やがて、女子が学校教育に参画するようになると、女子にも体育の必要性が認識されるようになった。しかし、女子に課された体育は、女性の「男性化」を避けるために、男子を対象として行なわれてきた体育の内容や形式とは異なるものが提供された。

女子の体育では、男子のそれよりも簡単かつ軽い内容で構成されていた。また、体育によって形成される（とする）「美しい」身体強調が、男子から女子に移行することにもなった。先に見たドイツ体操とスウェーデン体操は、当初、男子の「男らしさ」獲得のための体操として考案されたが、1820年代に入ると、「優雅さ」や「美しさ」を追求するための「女性用体操」へと変容していき、やがて「カリセニクス」(calisthenics：美容体操の一種)としてアメリカで普及していくこととなる。

カリセニクスはアメリカの女子大学で、「美と健康」を目的とするダンスの修正版として導入されていった(岸野ほか、1110)。美と健康の強調が女性の身体に付与されるようになったのは、女性の「男性化」を避けるためであったが、女性の「男性化」は、近代社会で

要請される私的領域で期待される女性の身体、すなわち次世代再生産機能を有する女性の身体という点からしても懸念された。つまり身体訓練を課す体育が、激しい身体活動によって、女性身体の次世代再生産機能を損ねる危険性があると思われ、それ故に、「男性化」に陥らないように「美しさ」が強調されるとともに、次世代再生産機能が十分に果たされるために「母体の健康」も女性の体育の中では重視された。

女子の体育が、「母体の健康」という観点から女子の身体教育に関わったとするならば、そこでは当然、「母親としてあるべき姿」なる「母性」観や「良妻賢母」思想が指導の前提にあったと思われる。その証拠に、「美しさ」という観念が単なる外見や容姿の問題としてだけではなく、女子の「健康的身体」の維持、管理のために、「清潔」や「衛生」といった観念とも結びつくようになり、自己の衛生管理の徹底が女子に求められるようになっていった（小野、202）。公私の分離によって果たされた近代社会の性別二元化を基盤とする女子の体育では、女性の「男性化」は避けられなければならなかった。それ故、当初は男性身体に向けられてきたまなざしが、女性身体に注がれるようになり、序列化や競い合いではなく、「美と健康」を基盤として女子の体育が定着することになった。そのような女性身体の差異化は、再度、スポーツ・体育以外の領域に差し戻され、女性の性役割が再生産されていくようになった。これらの過程を繰り返すことによって、スポーツ・体育の性別二元化体制は確立するようになったと言える。

8. おわりに

本稿では、スポーツの近代化に関する説明に、性別の二元化を含めることの妥当性について検討してきた。女性学・ジェンダー研究では、異性愛主義に基づく性役割と近代家族の誕生が、近代社会の特徴を顕在化させる重要な契機として捉えられていたのに対し、スポーツ研究におけるスポーツの近代化では、そのことがほとんど触れられてこなかった。本稿で明らかになったように、現在まで残るスポーツの性別二元化体制は、スポーツがもともとその体制を保持してきたというよりも、近代社会の中で要請される身体への意味づけに、身体を介して行なわれるスポーツが利用される過程の中で確立されてきた。また、その過程でスポーツ自体も整備され、体系化されていくようになっていった。

スポーツの近代化とは、アレン・グットマンが指摘するようなスポーツ内部の構造的変化に加えて、スポーツ外部の領域との相互連関の中で、スポーツが社会の近代化を推進するための手段として用いられ、それと同時にスポーツそのものが意味づけ直されていくプロセスでもあったと言えよう。しかしながらこのことは、スポーツ以外の領域における社会の変化に応じて、スポーツも変化する可能性を持ち得ているということを意味していることは忘れてはならないだろう。

生産性を重視する資本主義社会から、消費を重視する社会へと変化し、公的領域と私的領域は、かならずしも男性と女性に割り振られることはなくなった。女性のスポーツ参画の拡大によって、従来、男性限定であった種目が女性にも解禁されるようになった。女性

アスリートに対する「女性らしさ」はますます強調される傾向にあるが、その一方で、スポーツを通じて女性の「男性化」もますます進むようになった。さらに、道徳的な意義を付与されて近代化を促進してきたスポーツも、今では経済的効果が最優先されるようになった。これにより、「見る／見られる」身体が必ずしも男性が見る側、女性が見られる側という従来通りの対立構造から説明しうるものではなくなった。男性アスリートも「見られる身体」として男性性を商品化し、女性がそれを消費するという現象も顕在化するようになった。このような事態から、スポーツの性別二元化体制はもはや形骸化し、むしろそれが強調される文脈においては、性の虚構性が、逆説的に暴かれてしまう契機を多く含んでいると言えるのかもしれない。

注

¹⁾ セジウィックが打ち立てた「ホモソーシャル」という概念は、同性愛（ホモセクシュアル）とは異なる異性愛男性の友情や同胞愛による連帯関係を指し、父権制社会においてホモソーシャル（友情）とホモセクシュアル（同性愛）は峻別されるが、セジウィックはその両者が、実は分かち難い関係にあることを、文学作品を通して解明してみせた。そして、男性同士の友情の中にある同性愛的な愛情や、友情の中にあってはならない欲望が見破られないために、同性愛嫌悪（ホモフォビア）と女性嫌悪（ミソジニー）が保持され強化されると、セジウィックは説いてみせた。

²⁾ 国際オリンピック委員会では、2000年のシドニー五輪から、性別判定検査の実施をなくしたと言われているが、そのすぐ次のアテネ五輪の直前に「性同一性障害」アスリートの参加許可を容認したことから、競技スポーツの性別二元化体制は、顕在化されずに保持されることになったと考えられる。

³⁾ スポーツ・ライターである玉木正之は「「スポーツとは何か？」という命題に対する回答としては、「スポーツ学者の数だけある」といわれるくらい数多く存在する」（20）と述べている。

⁴⁾ 性、年齢、民族、人種、障害、階層などあらゆる差異を超えてスポーツを普及・振興をはかるための運動。ヨーロッパを中心に1960年代から始まった。

⁵⁾ 「国民化」とジェンダーについては、上野千鶴子の『ナショナリズムとジェンダー』（青土社、1998）第1章に詳しい。

⁶⁾ エドワード・ショーターは、『近代家族の形成』（田中俊宏ほか訳、昭和堂、1987年）の中で、フィリップ・アリエスの説を支持しながらも、アリエスが上流階級に焦点をあてていることを指摘し、一般庶民においては幼児に対する考え方が18世紀末まで変化が中ったこと、また、階級や地域によってはさらにその後も変わっていなかったことをアリエスの分析の修正点として加えている。（176-213）

⁷⁾ 「母」や「母性愛」という考え方は、主に西欧社会の新興中産階級において広まり、19

世紀末には労働者階級や農民にも普及していったとされる。また、親が自分の手で子どもを育てるという慣習が、19 世紀の西欧社会における新興中産階級のあいだで広まり、その中から「主婦」という概念も誕生するようになった。

⁸⁾ 古代から存在してきた同性愛行動が、特殊な人格と類型化されるようになったのは 1869 年のことである。それは、ハンガリー人医師の K.M.ベンケルトが「同性愛者」という語を導入し、治療の対象とみなすようになったことに起因する。

ⁱ⁹⁾ この点についてはダニエル・A・マクミランの「スポーツと男らしさの理想」に詳しい。

¹⁰⁾ ジョージ・L・モッセによれば、フランスとイタリアのグーツムーツの後継者も同様の考えを持っていたという。例えばルドルフォ・オーベルマンは、男性の中性化（男性そのままの外見はしていても、女性の不活性さに陥ること）から若者を守らなければならないとし、体育の必要性を強調していた。彼にとって「体育とは、女々しさを克服し、訓練され、勤勉で控えめで辛抱強い「男らしい男」を作り出すものであった」（71）と、モッセは記している。

¹¹⁾ スーザン・カーンは、*Coming on Strong*の中で女性が自転車に乗り始めた頃、活発に自転車乗りに興じる女性に対して、子宮がずれたり、顎が突き出たりといった外見や容姿に対する懸念が常につきまとっていたことを指摘している。また日本において、女子に対する体育の導入が遅れたのは、女子が身体訓練をすることによって「変性男子」となり、女性の外見が損なわれると考えられたからであると、高橋一郎は『ブルマーの社会史：女子体育へのまなざし』の中で言及している。

文献

アルチュセール、ルイほか『アルチュセールの＜イデオロギー＞論』三交社、2005。

Anderson, Benedict.. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*.

Verso, 1983. 白石さやほか（訳）『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版、1997。

Aries, Philippe. *L'Enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Plon, 1960. 杉山光信（訳）

『＜子供＞の誕生：アンシャンレジェーム期の子供と家族生活』みすず書房、1981。

Buttler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and Subversion of Identity*. New York and London:

Routledge. 1990. 竹村和子（訳）『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社、1999。

Cahn, Susan K. *Coming on Strong: Gender and Sexuality in Twentieth-Century Women's Sport*.

Massachusetts: Harvard UP, 1994.

ダニエル・A・マクミラン「スポーツと男らしさの理想」 トーマス・キューネ編著『男の歴史：市民社会と＜男らしさ＞の神話』星乃治彦（訳）、柏書房、1997：85-98。

Elisabeth, Badinter. *L'Amour En Plus: Histoire De L'Amour Maternel*. Livre de Poche, 1981. 鈴木

- 晶（訳）『母性という神話』筑摩書房、1998.
- Foucault, Michel. *Surveiller et Punir: Naissance de la prison*. Gallimard, 1975. 田村俣（訳）『監獄の誕生：監視と処罰』新潮社、1977.
- L'Historite de la sexualite, I, La volonte de savoir*. Gallimard, 1976. 渡辺守章（訳）『性の歴史 I：知への意志』新潮社、1994.
- 藤野豊『強制された健康：日本ファシズム下の生命と身体』吉川弘文館、2000.
- Guttman, Allen. *Games and Empires: Modern Sports and Cultural Imperialism*. Columbia UP, 1994. 谷川稔ほか（訳）『スポーツと帝国：近代スポーツと文化帝国主義』昭和堂、1997.
- 橋本伸也ほか著『近代ヨーロッパの探求 4：エリート教育』ミネルヴァ書房、2001.
- 樋口聡『遊戯する身体：スポーツ美・批評の諸問題』不昧堂出版、1994.
- 稲垣正浩『スポーツ文化の脱構築』叢文社、2001.
- 岸野雄三ほか編『最新スポーツ大事典』大修館書店、1987.
- 宮澤康人『改訂版 近代の教育思想』放送大学、1998.
- Mosse, George L. *The Image of Man: The Creation of Modern Masculinity*. Oxford UP, 1996.
- 細谷実ほか（訳）『男のイメージ：男性性の想像と近代社会』作品社、2005.
- 村田鈴子『アメリカ女子高等教育史：その成立と発展』春風社、2001.
- 西川祐子『近代国家と家族モデル』吉川弘文館、2000.
- 岡野八代『シティズンシップの政治学：国民・国家主義批判』白澤社、2003.
- 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、1989.
- 小野芳郎『＜清潔＞の近代：「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ』講談社選書メチエ、1997：202
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Columbia UP, 1985. 上原早苗ほか（訳）『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会、2001.
- Epistemology of the Closet*. University of California Press, 1990. 外岡尚美（訳）『クローゼットの認識論：セクシュアリティの20世紀』青土社、2003.
- 杉本厚夫『スポーツ文化の変容：多様化と画一化の文化秩序』世界思想社、1998.
- 高橋一郎ほか著『ブルマーの社会史：女子体育へのまなざし』青弓社、2005.
- 玉木正之『スポーツとは何か』講談社現代新書、1999.
- 田間泰子『母性愛という制度：子殺しと中絶のポリティクス』勁草書房、2001.
- Thomas, Raymond. *Histoire du Sport*. Universitaires de France, 1991. 蔵持不三也（訳）『スポーツの歴史』白水社、1993.
- 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社、1998.
- 『差異の政治学』岩波書店、2002.

Abstract

Gender Binary Structure in Modernization of Sport

Rieko YAMAGUCHI

This paper examines the process of generation of gender binary structure in sport. Allen Guttmann, American sport historian, explains on sport modernization with seven features; secularization, impartiality, bureaucratization, specialization of roles, rationalization, numericalization, and the pursuit of record. Although these implicate specific contents that sport changed in the process of modernization, I propose that gender binary structure should be included into sport modernization as one of the features. Feminism and gender studies also have discussed on the feature of modernized society, and clarified that gender binary is neither essential nor universal.

The athletic sport has been based on gender binary system, but there are few scholars who mentions about generation of gender binary system in the relation with the process of sport modernization. This paper concerns on validity to include gender binary as one of the features of sport modernization, examining the change of sport as well as of the Western society in the 18th to 19th century. Upon discussing, I was based on the concept of gender by Judith Butler, gender-performance theory.